

ろう。とりわけ、この学生がトップで提出した。〈早かろう悪かろうか〉と思いきや、そうでもないかなと思うが…。

(文責 浅川)

本書は日本列島に生息する在来食肉類に関する最新の生態研究を紹介したもので、次の生物地理に準じた4部構成となっている；第Ⅰ部 クロテン、ヒグマ、第Ⅱ部 キツネ、タヌキ、イイズナおよびオコジョ、第Ⅲ部 ニホンイタチ、ニホンテン、ニホンアナグマおよびツキノワグマ、第Ⅳ部 シベリアイタチ、イリオモテヤマネコ、ツシマヤマネコおよびラッコ。

クロテンは、北海道の国内外来種ニホンテンとの競合問題が、度々、議論されて、気になっていたが、ニホンテンは石狩低地帯の西側に生息しているようなので、クロテンとは分断されているように見えた (p. 39 図 1.7)。だが、ニホンテンの分布が明らかになっている地域が限定されているだけであり、いずれにせよ現時点では、競合によるクロテンの生息域侵害を想定して対策を講ずる必要があるようだ。ちなみに、クロテン・ニホンテン両種が生息している地点が自分の所属大学近辺 (野幌森林公園) であったことに驚かされた。

ヒグマに関してはやはり人との軋轢に関する内容が多かった。エゾシカの増加による草本類の不安定化は、ヒグマの食性にも変化を与え、農作物被害が増加するという (p. 46 ~ 47)。ただ、ヒグマの場合は農作物や家畜への直接被害にとどまらず精神的不安も多い。それにより出没があると、周辺農家では人手が集まらないなどの訴えもある (p. 56)。このような間接的被害も考えてみれば非常に大きな問題となることに気付かされた。

北海道で生まれ育った自分 (木村) は、やはり、キツネにおけるエキノコックス (症) の記述が気になった。エキノコックスが、戦前、養狐のために、千島列島から人為的に移入したことが主因とする説やキツネ個体数の減少に疥癬の影響が大きかったとする説は、新たな視点を獲得することができた (p. 77, 80 ~ 82)。また、(キツネと同様に、身近なタヌキは) タメ糞場が臭気による資源情報の共有や個体識別の装置としての存在意義には、純粋に、驚かされた (p. 98)。競合相手となる外来種アライグマもタヌキのタメ糞場を訪問する事例が観察され (p. 99)、餌資源の情報を盗用し、タヌキとの餌資源をめぐる競合が加速されるのではないかと自分 (木村) は考えた。また、タヌキの死因の多くはロードキルによるものとされていたが (p105)、疥癬による影響も小さくは無いと自分 (木村) は考えるがどうだろうか。

イイズナで、特に驚かされたのは、積雪下で出産が行われると



『日本の食肉類—生態系の頂点に立つ哺乳類』

増田隆一 編著

2018年8月
東京大学出版会 発行
320頁
定価 (本体 4,900円+税)

木村優樹・浅川満彦 (酪農学園大学 獣医学類)

この学生 (木村) は水族館獣医師を志向するので、最新姉妹本『日本の鯨脚類』の方が相応しかったが、ゼミ配属直前、別媒体で紹介されてしまった (浅川, 2020)。しかし、原案を見る限り、北海道生まれとしての視点からの感想や独自の考えが散見され、有益な読書体験となったことが窺え、指導教員としてはひとまず安堵。ところで、この書籍紹介という課題、例年に比べ作業速度が早い。コロナ禍の影響で書物とじっくり接する時間が増えたのだ

いうことであつた。極域において小型齧歯類が豊富であればこのような条件下でも出産するという (p. 117)。しかし、子育て方法などはいまだに謎なようで、とても興味深かつた。ニホンイタチではスクリヤビン線虫という寄生虫が、頭骨変形や穿孔病変の原因になる点に注目した (p. 145 ~ 146)。その前に、神経症状や致死的な作用を及ぼすであろうと考えたが、どうやら、そうではなく、しかし、詳細は不明という。また、ニホンイタチにおける寄生率は約 25%、一方、イイズナやオコジョではほぼ 100% (p. 146) という好適・非好適宿主の差異の原因も興味深い。

ニホンアナグマの社会構造 (時に血縁関係にあるオスのみならず非血縁個体が母子単位に加わり小グループ形成) が、餌確保、有効な交尾や育子にプラスとなること (p. 191 ~ 192)、個体間競争を緩和するために冬眠や穴ごもりを機能させたことなど (p. 187)、他種とは異なっていた点で関心がわいた。

ツキノワグマの体重の年内変動に関する知見は、この動物を野生に近い状態で展示する際のヒントになりそうだ。冬眠は 10 月下旬から 12 月の間に開始し、3 月から 5 月にかけて終える (p. 213)。よって、飼育個体では冬眠直前の 12 月が最も体重が重く、終了直後の 5 月に最も軽いのだが、野生個体の蓄積脂肪量は 7 あるいは 8 月に最低値を示しているという (p. 203)。体脂肪を冬眠中に使い切らず、冬眠明けの餌確保のために温存したと想像した。しかし、飼育下では、冬眠終了直後から、労苦も無く餌が供給されるため、そのまま体重の増加がみられる。それならば、冬眠明け直後の餌供給はなるべく制限した方が野生に近い姿を見せることはできないか。

イリオモテヤマネコは西表島というネコ科最小の生息地で維持され、ネコ科最大幅の食性を持つことが大きな特徴だが、自分が想像するに、イリオモテヤマネコにとって競争者となる種がいなかったことも、食性の幅を広げられたひとつの要因と考えた。ラッコが頻繁に鳥を捕獲していることは驚きであつた (p. 272-273)。飛べない状態にした鳥を放しては追いかけて遊んでいるという。高度な脳の発達状態を示しているのであろう。

日本の食肉類について、基礎的なところから少し踏み込んだ所まで手っ取り早く学べるばかりか、現在テレビニュースにもなるような問題にまで把握でき、本書はお勧めである。 (文責 木村)

補足をしておく。文中「スクリヤビン線虫」とは、偉大な旧ソ連の蠕虫分類学者に献ぜられた *Skrjabingylus* という属名の種で、コアカリ的には肺虫科の仲間、たとえば、豚肺虫が良く知られる。ナメクジ類やカタツムリ類を中間宿主とし、待機宿主 (文献によ

り第 2 中間宿主をとる説もある) がトガリネズミ類や両生・爬虫類などである。本書のこの部分には、他の寄生線虫についても言及され、また、エキノコックスについて紹介されたキツネの章は、北海道立衛生研究所で多包虫症防疫を一手に引き受ける第一線の哺乳類生態学者により著されており、野生動物医学的にも重要な資料となつていた。 (文責 浅川)

引用文献

浅川満彦. 2020. 書籍紹介『日本の鰭脚類—海に生きるアシカとアザラシ』。北海道新聞 2020 年 8 月 19 日夕刊科学面。